

グスク時代初期の土坑墓

—喜界島城久遺跡群の土坑墓との比較を中心として—

宮城 弘樹

はじめに

グスク時代初期¹の研究は近年急速に進展している。中でも喜界島城久遺跡群の研究が深化し、これまで漠然と捉えられてきたグスク時代初期の時間推移や遺構理解において標識的な資料を多く提供している。拙稿（宮城 2016）では滑石製石鍋を中心にグスク時代の動態的研究について論を進めた。その際、滑石製石鍋以外の考古資料については全て課題とした。そこで本論は、副題にあげた喜界島城久遺跡群の土坑墓と琉球列島のグスク時代初期の土坑墓の比較検討を行い、琉球列島における農耕開始期について考えてみたい。

1. 城久遺跡群の土坑墓

城久遺跡群は、標高 90～160m の台地の縁辺に立地する。山田中西、山田半田、半田口、小ハネ、前畑、大ウフ、半田遺跡を総じて城久遺跡群と呼称する。2002～2016 年まで継続的に数次に渡り調査が実施されている。調査原因は土地改良事業による記録保存を主とするが、一部現地保存されている。あわせて範囲確認調査も実施され、広範な地域が調査されている。総括報告書によれば、その調査面積の総計は 83,750 m²にも及ぶ。

これまでに確認された土坑墓は 49 基を数え、葬法、墓坑形態、副葬品の組み合わせ及び出土遺物の年代から、Ⅰ期：①須恵器の蔵骨器を伴う火葬墓→Ⅱ期（前半）：②カムイヤキ・白磁・ガラス玉等を副葬品とする焼骨再葬墓→Ⅱ期（後半）：③副葬品をもつ伸展葬の土葬墓→Ⅲ期：④副葬品を持たない土坑墓で前半は弱い屈葬、後半を強い屈葬という変遷（野崎 2015）が想定されている（図 1）。また、②の初現を 11 世紀、②焼骨再葬から③土坑墓への移行期を 12 世紀半ばという年代観についても言及している。

Ⅰ期は円形の土坑に古代の須恵器が蔵骨器として使用埋設され、須恵器内には焼けた骨が納骨されている。大ウフ遺跡土坑墓 1 号がこれに該当する。

Ⅱ期前半は焼骨の再葬墓でしばしばカムイヤキが土坑内から出土するが、これは蔵骨器ではなく副葬品とされる。円形の焼骨再葬墓が山田中西遺跡土坑墓 4 号や山田半田遺跡土坑墓 1・2 号で確認されている。長方形の墓坑に焼骨再葬されるものが小ハネ土坑墓 2 号で確認された掘り返し痕から、土坑内で一度土葬を行った後、掘り起こして周辺で火葬し、

¹ 本論で扱うグスク時代初期の遺跡とは、琉球列島における農耕開始期の遺跡で、白磁、滑石製石鍋、カムイヤキが出土し、年代的には 11 世紀～13 世紀頃までの遺構を主とする。しかし、一部年代幅をもたせて 14・15 世紀の土坑墓も含み集成している。また、城久遺跡群などではこの年代を遡る事が指摘されているが、時間的推移の理解に資するためこれに加えている。なお、大泊浜貝塚もグスク時代ではなく、無土器期末とも理解されているが、先の遺物を伴うことからこれも含めて紹介している。

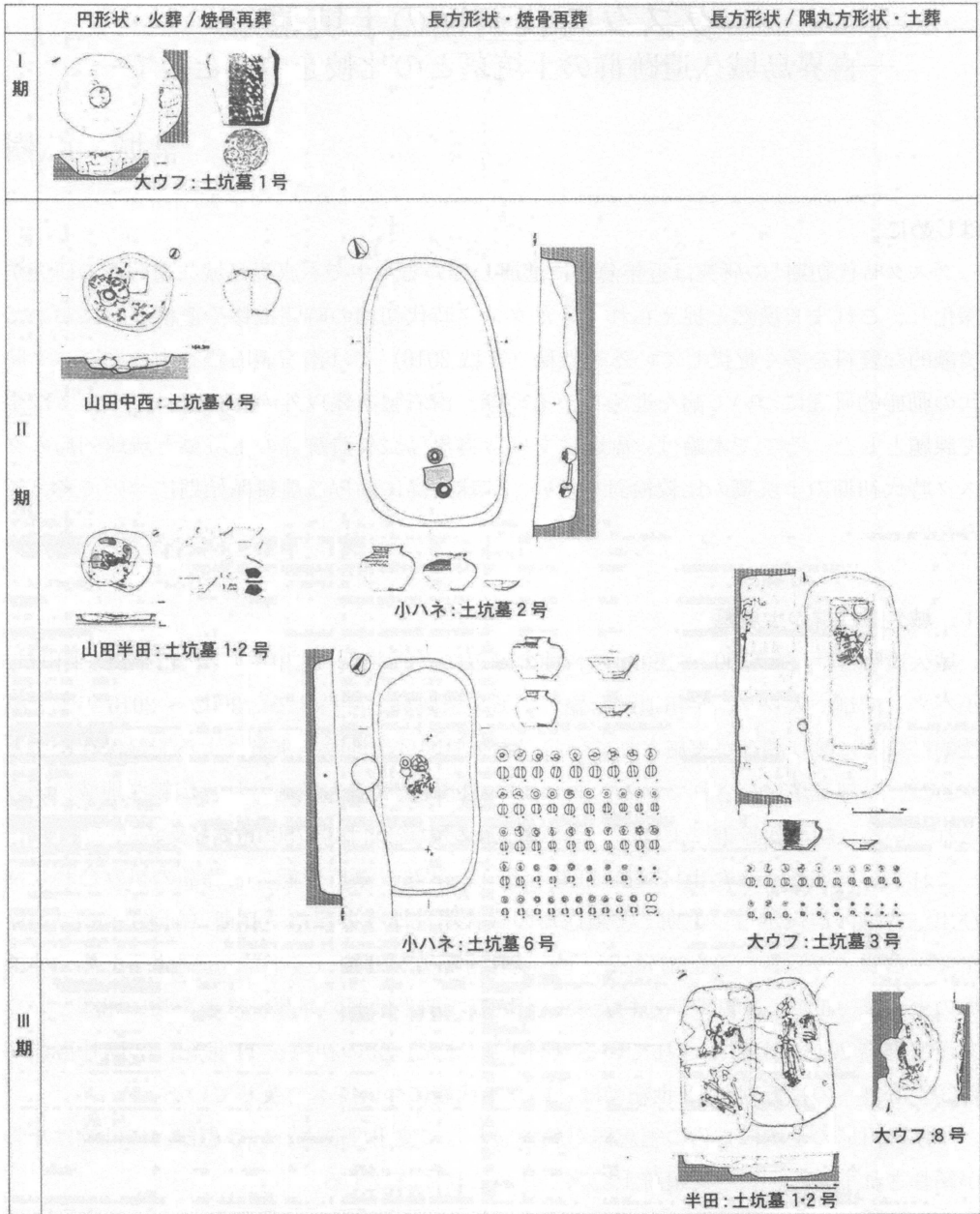


図1 城久遺跡群土坑墓変遷図 (野崎 2015 より)

同じ土坑内に焼骨を副葬品とともに安置するという行程が復元されている（狭川 2008）。またⅡ期の後半には長方形の墓坑を掘り、木棺に伸展葬の姿勢で納棺これを土葬し、副葬品が伴うとされる。大ウフ土坑墓 3 号は木棺に葬られた人物にカムイヤキや白磁、ガラス玉が伴っている。

Ⅲ期は副葬品を伴わない土坑墓で屈葬となる。半田土坑墓 1・2 号や大ウフ土坑墓 8 号がこれに該当する。強い屈葬は大ウフ・半田遺跡で確認される事例とされ、半田遺跡の主体が 13 世紀であることなどから、強い屈葬の土坑墓はⅠ・Ⅱ期から後続する様相になると理解され、弱い屈葬から強い屈葬へという変遷が想定されている。

2. 奄美諸島の土坑墓（図 2）

喜界島 城久遺跡群以外を以下に紹介する。川寺遺跡では 150 基以上の土坑墓が確認されている。現時点では報告書が未完のため詳細は報告の刊行を待ちたい。崩り遺跡では 2 基の焼骨再葬墓が検出されている。

奄美大島 宇宿貝塚では焼骨が納められた 10 世紀頃の本土産須恵器が出土している（1）。弥生時代の母子埋葬として報告される 1 号・2 号人骨（2）については、近年の城久遺跡群の成果を踏まえ中世である可能性が指摘されている（野崎 2017）。またこのほかに、カムイヤキを伴い口からガラス玉 1 個が出土した乳児骨（3）、土坑墓に軽く脚を曲げた仰臥葬の幼児骨が検出されている（4）。宇宿貝塚東地区（ダンベ山）では、グスク時代の人骨が 2 体出土している。万屋グスクでは 1986 年に土砂入れ替えに際して人骨が出土、1 号は屈葬、2 号は伸展葬による埋葬で年代については中世と解されている。1997 年の調査では、3 層から 8 体の屈葬人骨が出土、単葬の 4 号（6）、重なりあって 1・2・3 号（5）、5・6 号（7）、7・8 号（8）が検出される。

徳之島 面縄貝塚では仰臥屈葬で頭骨と脛骨の無い人骨が検出されている（9）。年代測定が行われており 15 世紀前後の年代値となっている。中里遺跡では人骨は出土していないが、木棺の痕跡とカムイヤキが土坑から出土しており墓と推定されている（10）。前当り遺跡では調査区 1 で長形状の土坑に焼骨再葬を行ったと考えられる土坑墓が 2 基検出されている（11・12）。表土掘削中で遺構検出面の確認ながらカムイヤキと鉄刀を伴う土坑墓 1（13）や円形状の土坑にカムイヤキを伴う焼骨再葬墓（14）が確認されている。



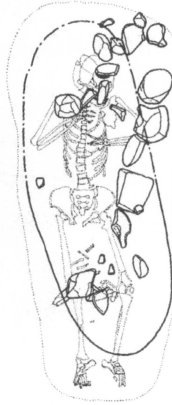
1 宇宿貝塚



4 宇宿貝塚



3 宇宿貝塚



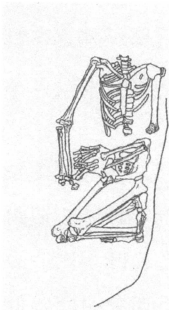
2 宇宿貝塚



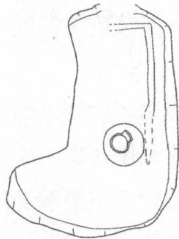
5 万屋グスク
1・2・3号人骨



6 万屋グスク
4号人骨



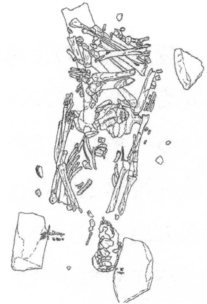
9 面縄貝塚
Dトレンチ埋葬人骨



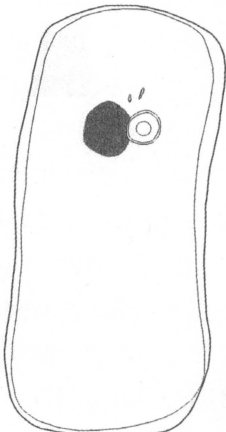
10 中里遺跡



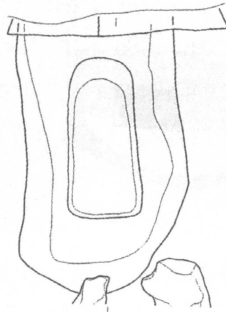
7 万屋グスク
5・6号人骨



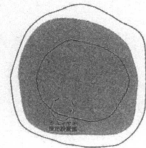
8 万屋グスク
7・8号人骨



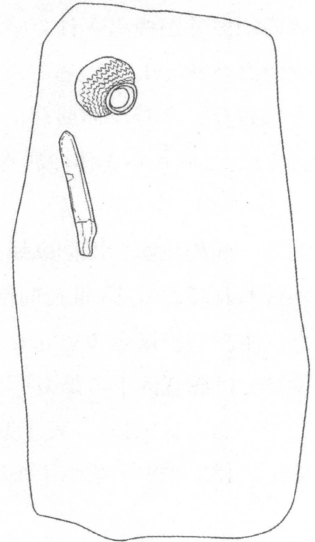
11 前当り遺跡
第1調査区土坑墓1



12 前当り遺跡 第1調査区土坑墓2



14 前当り遺跡 第4調査区土坑墓2



13 前当り遺跡 第4調査区土坑墓1

図2 奄美諸島の土坑墓 (S=1/30)

3. 沖縄諸島の土坑墓 (図4)

沖縄本島 沖縄本島の北谷町キャンプ桑江北川地区ではこれまでにグスク時代初期の遺跡が複数地点調査され注目される成果が報告されてきた。いずれも標高約5mの海岸に面した砂丘地に立地する遺跡で、直線距離約1kmの範囲に該当する時期の遺跡が北から平安山原A遺跡、伊礼原D遺跡、小堀原遺跡、後兼久原遺跡がある(図3)。また、後兼久原遺跡から約4km南にある宜野湾市の伊佐前原第一遺跡でもグスク時代初期の土坑墓がみつかり、両遺跡の間の北谷城と併せ遺跡が密集する地域となっている。

平安山原A遺跡では、土坑墓が2基確認されている。土坑が判然としない人骨11(15)、ある程度腐敗の進んだ死体を土坑内に埋納処理した人骨12(16)が検出されている。後者は長さ23cmの刀子が被葬者の背骨深く刺さった状態で検出されている。伊礼原遺跡はピット内(SP8土坑墓)から1歳未満の乳児骨が横臥屈葬の姿勢で検出されている(17)。伊礼原D遺跡では12世紀~13世紀前半の強い両手両脚を強く屈折した姿勢で顔面が土器に覆われている人骨が葬られた土坑墓が1基検出されている(18)。小堀原遺跡は土坑墓が6基確認されている。2号土坑墓は長軸87cm、短軸70cm、深さ28cmの土坑に、長軸36cm×短軸15cmの平面長方形に焼骨がまとめられた焼骨再葬墓である(19)。5号土坑墓はやや脚を曲げるもののおおよそ伸展葬と考えられる姿勢で、頭は東南に向き、頭のす



図3 北谷町字伊平周辺の遺跡分布図(北谷町2012より)



図4 沖縄諸島の土坑墓 (S=1/30)

ぐ近くにカムイヤキが副葬される。なお、上部には礫が配されている (20)。1・3・4・6号土坑墓はいずれも乳幼児とみられ、骨の残りが悪いため判然としないが、屈葬と考えられる。6号は滑石製石鍋を加工した滑石製品を枕のように木棺に葬られたと推定されている (21)。後兼久原遺跡は土坑墓が4基確認されている。1号 (22)・2号・4号 (23)土坑墓はいずれも仰臥屈葬で膝を曲げ、胸に手を置く屈葬姿勢と推定される。3号土坑墓は幼児の伏臥屈葬で墓の上には礫が体全体を押さえるように置かれている (24)。北谷城では、屈葬の人骨周辺から合計5本の木の棒が検出されており屈葬を固定するためと推定されている (25)。伊佐前原第一遺跡は土坑墓が4基確認されている。人骨の保存状態は悪いものの、埋葬遺構1は仰臥屈葬、埋葬遺構2 (26)と埋葬遺構3は木棺墓で頭位方向はいずれも東南で一致する。埋葬遺構4は頭骨周辺から土器片が出土することから土器をかぶっていたと考えられる (27)。

沖縄本島では、ほかにも伊波後原遺跡で、両膝を曲げ、両腕を腹部に置く人骨が検出されている (28)。また、大里城跡、具志川グスク、越来グスク、浦添城跡、勝連城跡などでも土坑墓が知られているが、年代的には先の事例に比べ相対的に新しいものと考えられており表1にこれを示した。総じて14世紀以降の事例は、屈葬が多く、ほとんどが乳幼児で占められる遺跡も幾つか見られる。本論では土坑墓を主として扱ったが、崖葬墓との関係が鍵を握っていると推定される。また、本来であれば貝塚時代の土坑墓からの変遷も考慮するべきで、これも今後の課題点として挙げておきたい。

沖縄本島周辺の離島 屋我地島の大堂原貝塚では弥生時代相当のⅢ層から出土した人骨を直接年代測定したもので11～12世紀頃の年代が得られている。同層からは人骨が3体出土している。土坑墓と推定され、埋葬姿勢は仰臥屈葬の1号人骨が比較的保存状態も良く姿勢もわかりやすい (29)。2号人骨には風習的抜歯が認められ年代測定値は939±46BPとされ、抜歯習俗の終焉を考える上で注目される事例となっている。浜比嘉島の浜貝塚では、両脚が組まれた人骨に刀子が副葬された状態で発見、残念ながら頭部は工事の際に失われている (30)。津堅島の津堅第2貝塚では貝塚時代後期以降と推定される人骨が住宅建設に伴って発見されている。両手を胸の上に組み、両脚を内側に折り曲げた姿勢で埋葬されている (31)。

4. 宮古・八重山諸島の土坑墓 (図5)

宮古島 宮古島では、近年土坑墓の検出例が増加している。友利元島遺跡は砂丘遺跡で2基の土坑墓が確認されている。土坑墓2は両手を腕のあたりで組むようにして出土しておりカムイヤキが副葬されている (32)。土坑墓1は仰臥屈葬となる (33)。ミヌズマ遺跡は湾に面した石灰岩小丘陵地の遺跡で隅丸方形の土坑墓が3基確認されている。埋葬姿勢のわかるものから脚を後ろ側に曲げる仰臥屈葬とされる。また、住屋遺跡や外間遺跡でも土坑墓が複数報告されているが、時期的に若干新しく14世紀～16世紀の土坑墓と考えられている。

石垣島 石垣島では、ピロースク遺跡で仰臥屈葬の成人と子どもの埋葬が検出されており、いずれも腹部に石灰岩礫を伴うとされる。姿勢は両手が胸で合わさり、両脚は内側に折り曲げている (34)。また、現市街地一帯の石垣貝塚、平川貝塚、喜田盛遺跡、八重山蔵元跡、登野城遺跡などで土坑墓及び石積や石棺状に配石したものなど多様な墓形式が報告されているが、いずれも時期的には新しく14～16世紀になることから本論では個別紹介は割愛する。総じて屈葬であり石灰岩礫を配して、あるいは石を組む、積むなど墓の形態にバリエーションが多く、しばしば副葬品を伴う。時期的更なる近世の事例も報告されている。

竹富島 花城村跡では仰向けで腕と脚を組んだ状態で人骨が検出されているが、崩落石積の石の中からの出土のため年代は不詳とされる。

波照間島 大泊浜貝塚では1983～1985年に行われた範囲確認調査によって3体の埋葬人骨が確認されている。1・2号は脚を内側に折り曲げる仰臥屈葬 (35)、3号は側臥位で膝を折る姿勢となっている (36)。いずれも副葬品は伴わない。1997年には学術調査が行われ、土坑墓が1基検出されている。伏臥屈葬の女性人骨で、両腕は腹部にあてられ、両脚を強く曲げる、女性の骨盤右側には、側臥位で新生児が埋葬されている (37)。

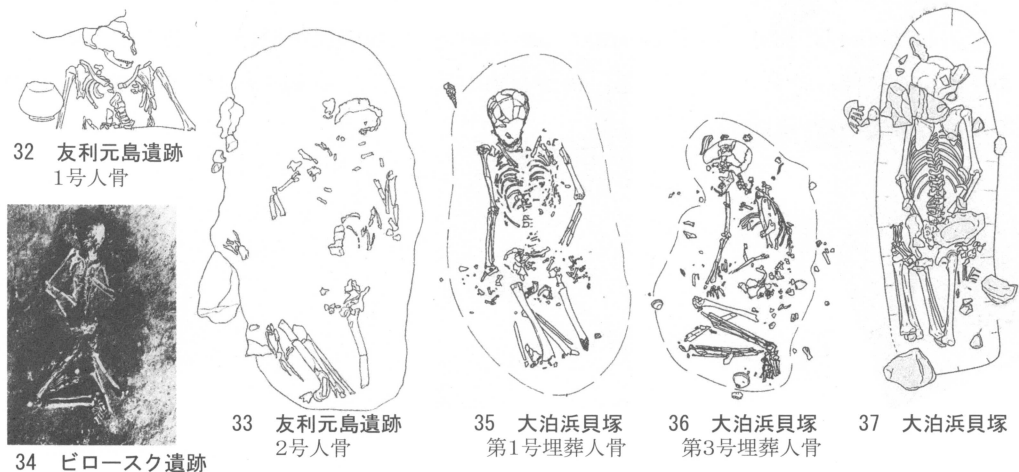


図5 宮古・八重山諸島の土坑墓 (S=1/30)

表1 グスク時代初期の主な土坑墓検出遺跡一覧

No	遺跡名	所在島名	火葬 骨壺	焼骨 再葬	土坑墓 (伸展葬)	土坑墓 (屈葬※1)	計	年代※2	参考文献				
1	城久遺跡群	喜界島						9~15世紀	喜界町2006・2008 喜界町2009 喜界町2011 喜界町2011 喜界町2013a 喜界町2013b 喜界町2013a				
	山田中西									10			10
	山田半田									6	1 (♂1)		7
	小ハネ									3	2 (U2)		6
	前畑									2	4 (U3) (♂、C1)	1 (♀1、C1)	8 (U1)
	大ウフ									4	1 (U1)	2 (U2)	8
	半田口									2	2 (U2)	1 (U1)	5
半田			5 (♂3、♀3、C1、U2)	5									
2	川寺遺跡	喜界島					150以上	11~15世紀	野崎2017				
3	崩り遺跡	喜界島		2			2	11後半~12世紀	喜界町2018				
4	万屋グスク	奄美大島			1?	9 (♀1、C1)	10	13~14世紀	笠利町1997b				
5	宇宿貝塚東地区 (タンベ山)	奄美大島					2	13世紀	笠利町1997a				
6	宇宿貝塚	奄美大島	1		4 (♀1・C3)		5	10~13世紀	笠利町2001 笠利町1997a				
7	内縄貝塚	徳之島				1 (U1)	2	15~16世紀	伊仙町2016				
8	前当り遺跡	徳之島		1?	1?		5	12世紀前後	伊仙町2018				
9	中里遺跡	徳之島			1		1	11~12世紀	天城町2010				
10	大堂原貝塚	屋我地島				3 (♂1、♀1、C1)	3	11~12世紀	名護市2005				
11	伊波後原遺跡	沖縄島				1 (♀1)	1	11~12世紀	当真1975				
12	具志川グスク	沖縄島				4 (C4)	4	14~15世紀	うるま市2006				
13	勝連城跡三の曲輪	沖縄島				1 (C1)	1	14~15世紀	勝連町1988				
14	越來グスク	沖縄島				9 (U2、C8)	9	14~15世紀	比嘉2017				
15	平安山原A遺跡	沖縄島				1 (♀1)	2 (♀1)	11~14世紀	北谷町2016				
16	伊礼原D遺跡	沖縄島				1 (♂)	1	12~13世紀	北谷町2017				
17	小堀原遺跡	沖縄島		1 (♂1?)	1 (♂1)	4 (C4)	6	11~13世紀	北谷町2012				
18	後兼久原遺跡	沖縄島				4 (♂3、C1)	4	12~13世紀	北谷町2003				
19	北谷城	沖縄島				1	1	11~12世紀	北谷町2010				
20	伊佐前原第一遺跡	沖縄島				4 (♀2、U2)	4	13世紀	沖縄県埋2001				
21	浦添城跡	沖縄島				1 (♀1)	1	14~15世紀	浦添市1985				
22	大里城跡	沖縄島				1 (♂1)	1	12~14世紀	大里村2001				
23	浜貝塚	浜比嘉島?				1	1	不詳	勝連町1993				
24	津堅第2貝塚	津堅島				1	1	不詳	勝連町1993				
25	友利元島遺跡	宮古島			1? (♀1)	1 (♂1)	2	11~12世紀	久貝2015a				
26	ミスズマ遺跡	宮古島				3 (U3)	3	11~15世紀	久貝2015b				
27	住屋遺跡	宮古島				18※3 (♂2、♀1、C8、U7)	18	12世紀後半~	平良市1999 久貝2010				
28	外間遺跡	宮古島				3 (♂2、♀1)	3	14~16世紀	宮古島市2010				
29	ピロースク遺跡	石垣島				2 (U1、C1)	2	13~15世紀	石垣市1983				
30	石垣貝塚	石垣島				1 (♂1)	1	15世紀後半	石垣市1993a (石垣市2009)※4				
31	平川貝塚	石垣島				2 (♂1、♀1)	5 (C3)	15~16世紀	石垣市1993b				
32	喜田盛遺跡	石垣島				4 (♂2、♀1、C1)	5 (C1)	15世紀後半	沖縄県埋2011				
33	八重山蔵元跡	石垣島				7 (♂2、♀1、C4)	9 (C2)	15世紀後半~	石垣市1997				
34	登野城遺跡	石垣島				67※3 (♂7、♀2、C58)	67	14世紀前半 ~17世紀初頭	石垣市2008				
35	花城村跡	竹富島				1	1	15世紀後半?	国立歴史博1999				
36	大泊浜貝塚	波照間島				4 (♂2、♀2、C1)	4	12世紀	沖縄県1986 安里・春成2001				

数字は土坑墓数 (♂:男性、♀:女性、C:幼小児、U:不明、数字は人骨数)
 ※1. 土坑墓屈葬が主体となる遺跡の中には伸展葬の乳幼児、未成人も一部含まれる。
 ※2. 年代は報告書の記載に基本的には従った。
 ※3. 土坑墓以外の石積墓、石組墓、石箱墓などを含む。
 ※4. 2009年報告の石垣貝塚は、下水道敷設工事に伴うもので、遺構の詳細については不詳。

5. 考察

喜界島城久遺跡群の土坑墓分類と整合させて琉球列島の土坑墓を俯瞰してみると。古代の須恵器壺に焼骨が納骨されるものは喜界島と奄美大島の宇宿貝塚で知られる。焼骨再葬墓は喜界島以外では、徳之島の前当り遺跡、沖縄本島の小堀原遺跡の2号土坑墓で確認されている。一方、伸展葬の木棺墓に副葬品の伴う事例は、徳之島の前当り遺跡土坑墓1、中里遺跡の土坑墓がこの可能性が高い。沖縄島では小堀原遺跡の土坑墓5でカムイヤキが伴うことからこれに該当すると考えられる。そのほか今回集成した土坑墓の多くはいずれも乳幼児を除けば埋葬姿勢はいずれも屈葬となっており、ほぼ副葬品も伴わない。ただ、友利元島遺跡の2号人骨は土坑墓と目されるが、腕を胸元に置いているのは確認できるが、下肢が見られないため姿勢は判然としない。胸元に手を置いた姿勢は、伸展葬にはほぼ見られず、屈葬にみられる姿勢のため屈葬とも推定されるが、本例はカムイヤキを副葬していることを考えると喜界島の土坑墓編年のⅡ期段階の可能性が高いと目され暫定的に伸展葬に含める。

なお、伊佐前原第一遺跡3号土坑墓、伊礼原D遺跡第5土坑墓のような頭骨に土器が被さった事例が確認されており、土坑も深く掘り込まれているなど城久遺跡群では確認されていない葬法も認められる。これらは、いずれも12世紀～13世紀前半と本論の扱う土坑墓の中では新しい段階に位置付けられる。時間推移とともに地域性も存在するものと考えられる。

筆者は以前、小堀原遺跡と後兼久原遺跡との関係について2つの仮説を示した。第1の仮説は社会的に上位、下位の関係、そして第2の仮説が時間的に前後と見る関係で、拙稿では第1の仮説を支持し集落における社会的関係を想定すると指摘した(宮城2014:206-207)。一方、瀬戸哲也は「移民集落の小堀原、在地との交流が進んだ次世代集落が後兼久原遺跡」として想定し第2の仮説について支持している(瀬戸2014:162)。出土遺物とりわけ陶磁器やカムイヤキに大きな時間的差を確認できるような状況は無いことから、ある一定の時間併存関係にあったと考えられる。しかし、遺構について仔細に見ていくと、喜界島の土坑墓の変遷における焼骨再葬墓を伴う小堀原遺跡と、これを伴わない後兼久原遺跡という関係を確認することができ、屈葬の土坑墓が主となる後兼久原遺跡がより後出である蓋然性は高くなる。ただ、小堀原遺跡が途絶した後に後兼久原遺跡に移行したのではなく、やはりほぼ同時代(C期)に両遺跡が併存していたと推定され、その上で小堀原遺跡は後兼久原遺跡とは相対的に社会的な地位が上もしくは重要な場としての差と想定しておきたい²。土坑墓の在り方そのものが階層差を含む可能性はあるものの、本論では喜界島の土坑墓変遷を援用し時間的推移に論点を絞っていききたい。

先の仮説1と2は必ずしも相反するものではなく、小堀原遺跡が時間的にはやや先行し、後に後兼久原遺跡が出現、その上で上位・下位の関係性が両遺跡では存続し、併存していたと捉えることも可能と考える。より直截的に述べれば、小堀原遺跡は最初の入植地であ

² 差は初代と二世の間に生じた社会的な上位下位であった可能性もあるが、保有物の構成比の相違が単純な時間的な先後にとどまるものではないとの考えに変更はない。

り、後兼久原遺跡がその二世的集落、即ち分枝集落という筆者仮説（宮城 2016:95）を補完する事象と捉え、拙稿において単純に時間的に併存するとした見解については、小堀原遺跡が若干先行していた可能性があるとして一部見解を改めておきたい。また、伸展葬から屈葬へ移行期を 12 世紀半ばとする喜界島の土坑墓編年の時間的解釈に依拠するなら、小堀原遺跡から後兼久原遺跡の出現、即ち枝分かれした時期が 12 世紀半ばに位置付けられる可能性が出てくる。これは大宰府編年 C 期（11 世紀後半～12 世紀前半）から D 期（12 世紀中頃～後半）の画期に相当するが、これまで遺物から想定されてきた年代観は後兼久原遺跡を大宰府編年 C 期には出現すると捉えられるとする想定から考えると若干新しく位置づけることになる。これについては多角的に検討する必要があると考える³。

現在までに確認されている、①須恵器蔵骨器火葬墓、②焼骨再葬墓、③カムイヤキ等の副葬品をもつ伸展葬の土葬墓の分布は図 6 に見るように、①は奄美大島・喜界島、②は喜界島と徳之島と小堀原遺跡、③は②に友利元島遺跡を暫定的にこれに加えて分布図に示し

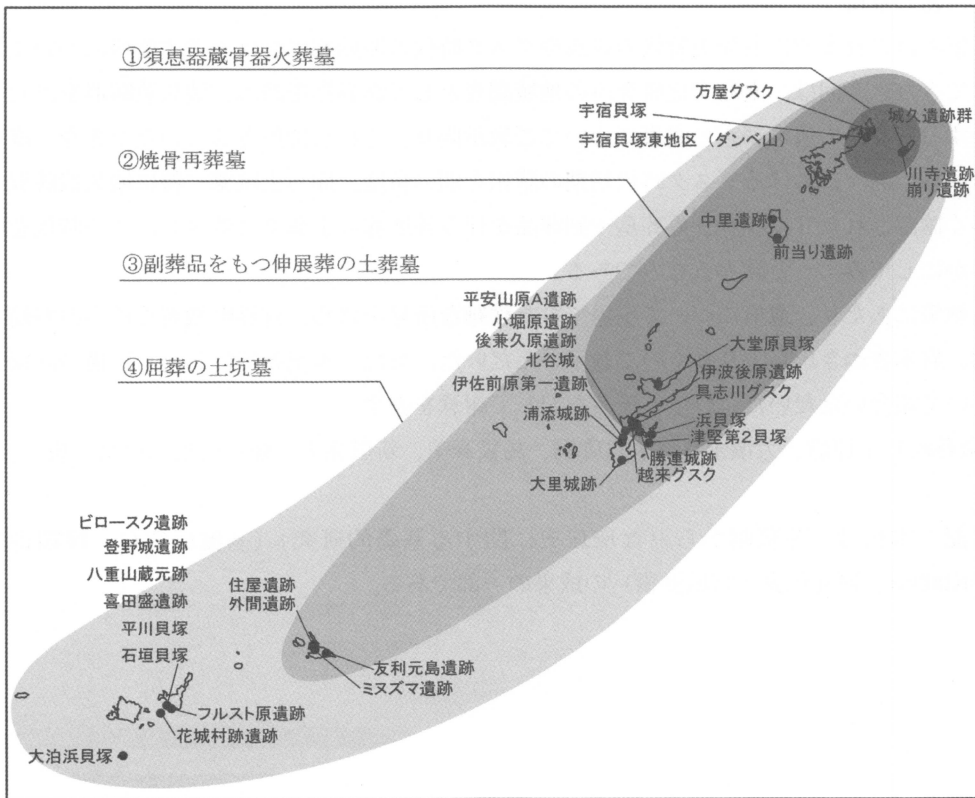


図 6 琉球列島におけるグスク時代初期の土坑墓の分布

³ 小堀原遺跡IV層（III a 層）はC期の遺物で構成されている。一方、後兼久原遺跡第I期はグスク土器の初期型式、玉縁白磁などを含むことからC期にはじまり、青磁鎚蓮弁文碗なども出土することからE期まで存続する。このことから土坑墓そのものが直接集落の分岐年代を単純に示すものとして考える必要は無いと考える。なお、本論では時間的推移に焦点をあてたが、埋納品を有する空間としての階層化検証素材としての視点からも考察を深める必要がある（中島 2008 : 192）。

た。これに後続する様相の④は奄美・沖縄・宮古・八重山諸島となり乳幼児など一部例外もあるがおおよそ屈葬姿勢となっている。また、姿勢や頭位にバリエーションが見られ、幾つか共通する要素もあることから、屈葬の編年や地域的なあり方についても考察を加えるべきだが、近年実施される喜界島川寺遺跡で屈葬が多く検出されているとされ、これを待って検討することが望ましいと考え後続する時期については改めて論じたい。

以上、これまで述べた墓のあり方は琉球列島における農耕受容の過程について、沖縄や先島地域よりも相対的に奄美が先行して受容された可能性が指摘（高宮・千田 2014）されていることとも整合的な現象と考えられる。また、カムイヤキや高麗陶器の出土状況（新里 2004）、滑石製石鍋の出土状況（宮城 2016）とともに地域的な偏りを読み取ることができると目され、これが農耕文化の伝播が、いつ、どの島（どの地域）に、どのように展開してのかについて探るためのヒントになると考えている。

5. おわりに

筆者はこれまでも先史時代の終焉やグスク時代の開始期における考古資料について論じてきた。今回は、南島文化研究所の地域調査として喜界島を訪ね、城久遺跡群をはじめとする喜界島の遺跡調査の成果についてご教示賜り、それを援用させていただき今一度琉球列島の島々におけるグスク時代初期の諸相を別の角度、即ち土坑墓、特に城久遺跡群で多く確認されたⅡ期の焼骨再葬墓や副葬品を伴う伸展葬の土葬墓に着目し、この時代を明らかにしてみようと試みるものである。

執筆にあたり、遺構について現場で得た詳細な所見を含め、喜界町教育委員会の野崎拓司、岩本さつき氏らより多くのご教示いただいた。また、本稿執筆にあたり遺構の詳細について紹介いただいた。以下、氏名を記して謝意を表す。

（敬称略）上原静、大瀨永寛、久貝弥嗣、島袋春美、新里亮人、瀬戸哲也、比嘉二規。

付記：本稿は「葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究」（基盤研究C、課題番号18K00981、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部である。

《文献》

- 安里進・春成秀爾（編）2001『沖縄県大泊浜貝塚』考古資料集 27 国立歴史民俗博物館
- 天城町教育委員会 2010『中里遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- 石垣市教育委員会 1983『ピロースク遺跡』石垣市文化財調査報告書第 6 号
- 石垣市教育委員会 1993a『石垣貝塚』石垣市文化財調査報告書第 17 号
- 石垣市教育委員会 1993b『平川貝塚』石垣市文化財調査報告書第 18 号
- 石垣市教育委員会 1997『蔵元跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第 21 号
- 石垣市教育委員会 2008『登野城遺跡』石垣市文化財調査報告書第 30 号
- 石垣市教育委員会 2009『石垣貝塚』石垣市文化財調査報告書第 31 号
- 伊仙町教育委員会 2016『面縄貝塚 総括報告書』伊仙町埋蔵文化財調査報告書 (16)
- 伊仙町教育委員会 2018『前当り遺跡・カンナテ遺跡』伊仙町埋蔵文化財調査報告書 (17)
- 浦添市教育委員会 1985『浦添城跡』浦添市文化財調査報告書第 9 集
- うるま市教育委員会 2006『具志川グスク I』うるま市文化財調査報告書第 4 集
- 大里村教育委員会 2001『大里城跡』大里村文化財調査報告書第 4 集
- 沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 74 集
- 沖縄県埋蔵文化財センター 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告第 4 集
- 沖縄県埋蔵文化財センター 2011『喜田盛遺跡』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告第 59 集
- 笠利町教育委員会 1997a『宇宿貝塚出土人骨編』笠利町文化財調査報告書第 23 集
- 笠利町教育委員会 1997b『笠利町万屋城』笠利町文化財調査報告書第 24 集
- 笠利町教育委員会 2001『国指定史跡 宇宿貝塚 宇宿貝塚ふるさと歴史の広場整備事業報告書』
- 勝連町教育委員会 1988『勝連城跡環境整備報告書Ⅱ』
- 勝連町教育委員会 1993『勝連町の遺跡』勝連町の文化財第 17 集
- 喜界町教育委員会 2006『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅰ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 喜界町教育委員会 2008『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅱ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)
- 喜界町教育委員会 2009『城久遺跡群 山田半田遺跡 (山田半田 A 遺跡・山田半田 B 遺跡)』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (10)
- 喜界町教育委員会 2011『城久遺跡群 - 前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)
- 喜界町教育委員会 2013a『城久遺跡群 - 大ウフ遺跡・半田遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)
- 喜界町教育委員会 2013b『城久遺跡群 - 半田口遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (13)
- 喜界町教育委員会 2018『崩り遺跡Ⅰ 第 2 分冊中世遺構・図版編』喜界町埋蔵文化財調査報告書 (16)
- 久貝弥嗣 2015a「宮古・八重山諸島における 12～16 世紀の埋葬遺構集成」『宮古研究』宮古郷土史研究会 pp.37-60
- 久貝弥嗣 2015b「ミスズマ遺跡・友利元島遺跡の調査成果に見る無土器期からグスク時代への変遷」『2015 年度沖縄考古学会 いま、宮古の考古学が面白い！ ー無土器期からグスク時代への移り変わりー』沖縄考古学会 pp.13-22
- 国立歴史民俗博物館 1999『村が語る沖縄の歴史ー歴博フォーラム「再発見・八重山の村」の記録』新人物往来社
- 狭川真一 2008『城久遺跡群の中世墓』『古代中世の境界領域：キカイガシマの世界』高志書院 pp.199-212
- 新里亮人 2004『カムイヤキ古窯の技術系婦と成立背景』『グスク文化を考える』新人物往来社 pp.325-252
- 瀬戸哲也 2014『グスク時代の 4 つの画期』『黎明館企画展 南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～』鹿児島県立歴史資料センター黎明館 pp.162-165
- 高宮広土・千田寛之 2014『植物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化：奄美・沖縄諸島を中心に』『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第 2 集】』六一書房 pp.127-142
- 当真嗣一 1975『石川市伊波後原遺跡調査概報』『南島考古』No. 4 沖縄考古学会
- 北谷町教育委員会 2003『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書第 21 集
- 北谷町教育委員会 2010『北谷城』北谷町文化財調査報告書第 32 集
- 北谷町教育委員会 2012『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書第 34 集
- 北谷町教育委員会 2016『平安山原 A 遺跡』北谷町文化財調査報告書第 38 集
- 北谷町教育委員会 2017『伊礼原 D 遺跡』北谷町文化財調査報告書第 41 集

- 中島恒次郎 2008「大宰府と南島社会—グスク社会形成起点—」『古代中世の境界領域：キカイガシマの世界』高志書院 pp.171-198
- 名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚』名護市文化財調査報告第17集
- 野崎拓司 2015「遺構・遺物からみた城久遺跡群」『城久遺跡群 - 総括報告書 -』喜界町教育委員会 pp.43-55
- 野崎拓司 2017.3.4「奄美群島」『葬墓制から見た琉球史研究会（資料集）』（口頭発表）於：沖縄国際大学
- 平良市教育委員会 1999『住屋遺跡（I）』平良市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 宮城弘樹 2014「貿易陶磁器出現期の琉球列島における土器文化」『琉球列島・先史原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第1集】』六一書房 pp.199-214
- 宮城弘樹 2016「グスク時代初期における出土滑石からみた集団関係」『南島文化』第38号 沖縄国際大学南島文化研究所 pp.89-99
- 宮古島市教育委員会 2010『外間遺跡』宮古島市文化財調査報告書第3集
- 比嘉二規 2017.3.4「グスク時代における沖縄諸島の葬墓制—越来グスクの事例を中心として—」『葬墓制から見た琉球史研究会（資料集）』（口頭発表）於：沖縄国際大学